

話す力を育む援助の工夫

— 言葉を楽しむ活動を通して —



浦添市立港川幼稚園

上原 朝子

目 次

I テーマ設定の理由	-----	1
II 研究の目標	-----	1
III 研究の仮説	-----	1
IV 研究の構想図	-----	2
V 研究の内容	-----	3
1, 言葉とは	-----	3
2, 発達段階における言語発達	-----	4
3, 言葉を育てるには	-----	7
4 教師の言葉と援助	-----	7
5 言葉と環境のかかわり	-----	8
6, 話す力を育む構想図	-----	8
7, 「言葉を楽しむ」年間計画	-----	9
VI 研究の実際	-----	10
1, 検証保育	-----	10
(1) 主題	-----	10
(2) 目標	-----	10
(3) 設定理由	-----	10
(4) 検証保育の実践	-----	10
(5) 公開検証保育指導案	-----	12
(6) T子の変容	-----	14
2, 教材の工夫	-----	15
(1) へんしんカード	-----	15
(2) ペープサート	-----	16
(3) 教材を使っておはなしを楽しんでいる様子	-----	17
VI 研究の成果と今後の課題	-----	18
1, 研究の成果	-----	18
2, 今後の課題	-----	18
おわりに	-----	18
引用・参考文献		

話す力を育む援助の工夫

——言葉を楽しむ活動を通して——

港川幼稚園 上原朝子

【要約】

この研究は、幼児一人一人が自分の気持ちや考えを言葉で表現することを楽しみ話したい気持ちを持つように援助の工夫をしていくものである。教師や友達とのやりとりを大切に、言葉あそびやおはなしを楽しむ教材を工夫することにより、言葉を楽しみ、話すことの喜びや楽しさが味わえるように進めてきた。その結果、言葉あそびに興味を持ち、絵やおはなしへの関心が高まり、話すことを楽しんでいる姿が確認できた。

キーワード □言葉あそび □教材の工夫 □話すことを楽しむ

I テーマ設定の理由

近年の少子化、核家族化、情報化の進行といった社会状況の変化は、幼児を取り巻く直接的な環境である家庭や親の意識にも影響をおよぼしている。そのため価値観が多様化し、知的教育への関心が高まっている反面、過保護の傾向が増大している。また、テレビやテレビゲームなどの、急速な普及により、子どもの遊びやコミュニケーションのあり方も変わり幼児の話す言葉にも大きく影響している。

幼稚園の教育目標に「日常生活の中で言葉への興味や関心を育て喜んで話したり聞いたりする態度や言葉に対する感覚を養うようにすること」があげられており、領域「言葉」の観点では、経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養うことが重視されている。

言葉は、身近な人との関わりを通して獲得されるものである。幼児は、園生活の中で教師や友達と心を通わせ様々な体験をすることが、言葉で表現する力を培っていくことになる。

そのためには、日常生活の中で教師や友達との信頼関係を築き、言葉を使って表現する意欲や言葉の感覚を養うための適切な言葉環境を作っていくことが必要であると考えられる。

本園のクラスの子どもたちは、生活の中での意思表示や話しをする時、モジモジしてうまく伝えられなかったり、自己主張の強い子におされて黙ってしまう子や、どのように言葉で表現したらいいのかかわからずコミュニケーションがうまくとれないといった様子が見られる。

これまでの自分の保育を振り返ってみると、子どもの言葉を引き出そうとすることに気をとられ、子どもの気持ちを受けとめ対応していただろうか。また、絵本を数多く読んであげることによって言葉のおもしろさや楽しさを伝えてきたつもりだが、遊びに活かしていくための工夫が足りなかったように思われる。

このようなことから、教師が子ども一人一人の言葉に耳を傾け、心の交流をはかり、言葉の楽しさを味わうような遊びを取り入れ、言葉の楽しさに気づかせていくための援助の工夫をすることによって、自分なりの言葉で表現する力を育むことができるのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 研究の目標

幼児が園生活の中で、先生や友達と心を通わせ話す力を育んでいけるように言葉あそびや絵本などを楽しめる環境づくり、援助のあり方を工夫する。

III 研究の仮説

基本仮説

- (1) 園生活の中で、一人一人の言葉に耳を傾け気持ちの交流をはかることにより、聞いたり話したりすることが楽しくなり、伝え合う喜びを味わうことができるであろう。
- (2) 園生活の中で、言葉あそびや絵本などを楽しむための援助の工夫をすることにより言葉の楽しさに気づき、友達との会話

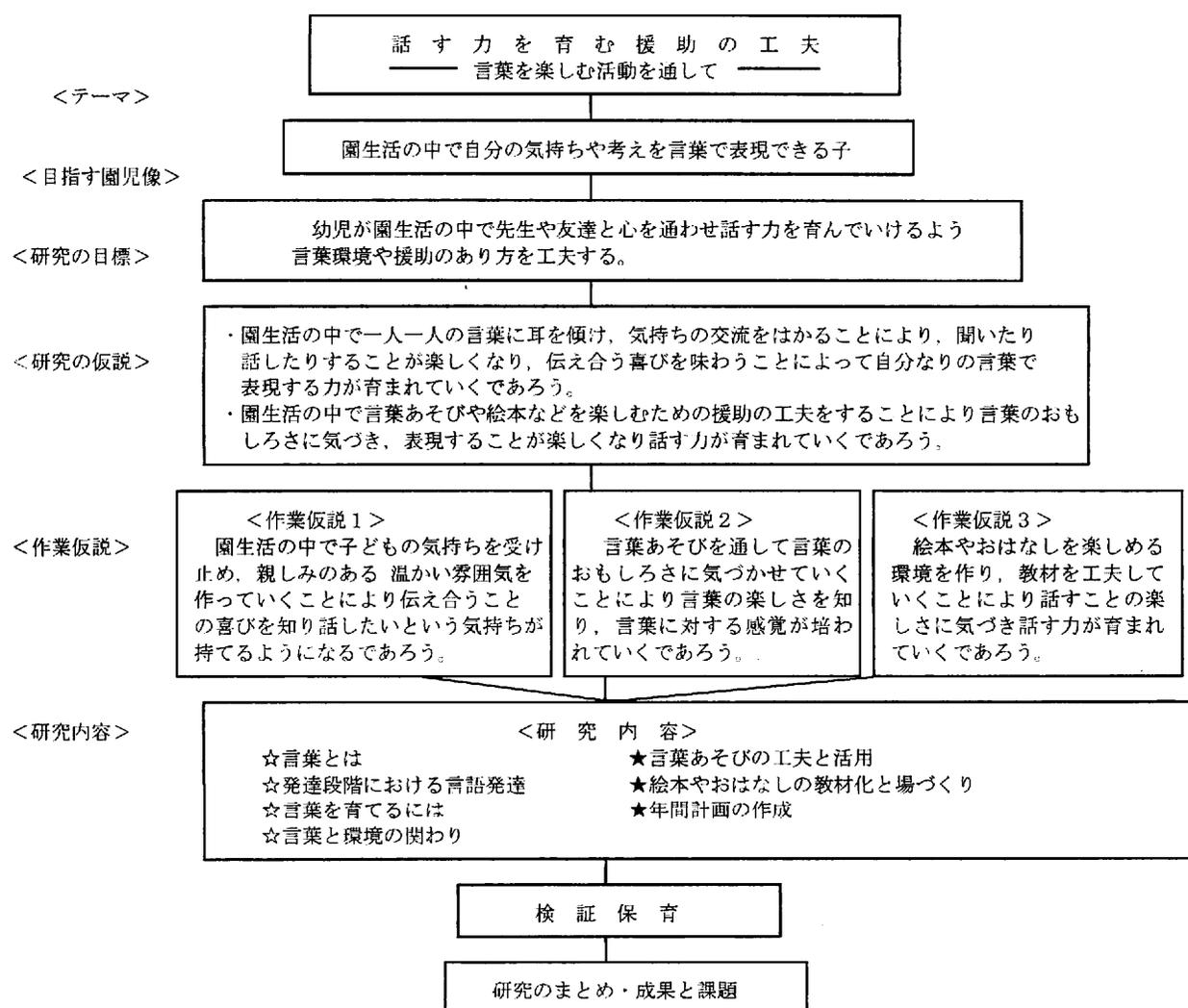
も豊かになり話す力が育まれていくであろう。

作業仮説

- (1) 園生活の中で子どもの気持ちを受けとめ話しを聞いてあげる雰囲気をつくっていくことで伝え合うことの喜びを知り、話したいという気持ちが持てるようになるであろう。
- (2) 言葉あそびを通して、言葉のおもしろさに気づかせていくことにより、言葉の楽しさを知り言葉に対する感覚が培われていくであろう。

- (3) 絵本や物語を楽しめる環境をつくり、教材を工夫していくことにより、会話も豊かになり、話す力が育まれていくであろう。

IV 研究の仮説



V 研究内容

1 言葉とは

言葉は、自分の思いや考えを伝える手段であり、人としての証ともいえる。

言葉の教育は、子どもの言葉の獲得を助け支える営みであり、子どもの人間としての成長を促し社会性が培われていくうえで大切なものである。

(1) 言葉の動き

①表す、伝える

言葉により、考えや気持ちを表し、伝え理解し合うことができる心と心のかげはしとなり、人と人との間に信頼のきずなを生みそれを強めていく。

言葉獲得の
支持基盤を育
てる。

- 先生や友達の言葉や話に興味や関心を持ち、親しみをもって聞いたり話したりする。
- したこと、見たこと、感じたことなどを自分なりに言葉で表現する。
- したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。

②考える、知る

ものごとについて、筋道を立てて考えたり、正しく理解するために、言葉はなくてはならないものであり、言葉を使うことにより心の内外の事がらに関し、人間らしく思考し、行動することができる

生活の中で
言葉を育てる

- 人の話を注意して聞き、相手にわかるように話す。
- 生活の中で必要な言葉がわかり、使う。
- 親しみを持って日常のあいさつをする。
- 生活の中で言葉の楽しさ美しさに気づく。

③思い浮かべる、新たに創り出す

自由にいろいろなことに思いを広げ、新しいものを生み出していくために、言葉の果たす役割は大きい。言葉があってこそ情操豊かな想像の世界を体験し、人間としての生活を高める想像の活動ができる。

イメージや
言葉の感覚を
育てる。

- いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
- 絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、想像する楽しさを味わう

(2) 領域「言葉」のねらいと基本

幼稚園教育要領の領域「言葉」のねらいとして3つの事があげられている。

- ①自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- ②人の言葉や話などをよく聞き、自分の

経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。

- ③日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。

- ・言葉は身近な人との関わり（言葉以外の動作、表現、もの）を通して次第に獲得していくものである。
- ・幼児は、自分なりの言葉で表現したり、言葉で応答したりする楽しさの中から話そうとしたり、聞こうという意欲や態度が育ってくる。
- ・自分の話を聞いてもらったり、人の話を聞いたりする豊かな生活の中から、日常生活に必要な言葉も分かるようになっていく。
- ・幼児は、言葉を使うことによって、ものの見方や考え方をより確かなものにし、思考や認識等も育っていく。
- ・生活の中で心を動かすような豊かな体験を豊富に持ち、自分が体験したことや考えたことを話したり、友達や保育者の話を聞くなどの伝え合う喜びを味わい、言葉への意欲や態度を育てていく。
- ・絵本や物語などの言語文化と出会い、想像の世界や未知の世界等を通して、思いを巡らしたり、友達や保育者と共感したり、共有したりしていく。
- ・日常生活の様々な場面や、生活文化等にふれ合う中で、言葉への感性、感覚を養うようにする。そして、状況、場面に応じて適切な言葉が使えるようにしていく。

(3) 話し言葉の重要性

幼児の言葉の生活は、話し言葉が中心となる。言葉は、幼児の意志そのものの現れであり、人との会話を通して培われていくものである。話すと言うことは、自分の考えをまとめていく作用を持っており、それによって、自分の気持ちや意志、考えたことを相手に通じるように話すことができる。それは、人に自分の内面を伝えるだけでなく、自分を知ることでもある。また、言葉で物事を考えていく、思考の筋道を育てる、物事の価値を判断していく力を養うことでも大切なのである。

(4) 話す言葉を育てる視点

- ・子どもが、ゆったりとした気持ちで話せるような雰囲気を作る。
- ・互いの言葉を認め合える人間関係を築く。
- ・子どもの表現そのものを受容する。
- ・感情の動きを読み取る。
- ・子どもの言動をよく観る。
- ・個人差への配慮をする。
- ・話す場を作る。
- ・言葉環境を豊かにする。
- ・絵本やおはなし等、言語文化とのかかわりが持てる場作りをする。

以上の視点から、環境や援助のあり方を考えていくことが大切である。

2 発達段階における言語発達

月令	言語的発達	発達の特徴
新生児	<ul style="list-style-type: none"> ・声のある方へゆっくりと顔をむける。 ・話しかけられるとじっと見て口を開けたり閉じたり共鳴動作がみられる。 ・母親の声を聞き分けて泣きやんだり、声の調子を聞き分けて反応するように 	

<p>6 か 月 こ ろ</p>	<p>になる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の名前を呼ばれると、その方を見る。 話しかけたり歌を歌ってやると口元や顔をじっと見る。 バイバイなど大人のことばを理解して反応するようになる。 絵本を眺めるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> 何かしてもらいたいときなど、声を出して注意をひく（自己刺激喃語） バーバー、マンマンなど、唇や舌を使った音節をつらね、強弱、高低をつけてしゃべる。（反復喃語） 有意味喃語が出始める（マンマ、ブーブーなど） 	<ul style="list-style-type: none"> 知っている人にほほえむ社会的微笑。 人見知りが始まる。 指さしが始まる。
<p>1 歳 ご ろ</p>	<ul style="list-style-type: none"> 大人が「ちょうだい」と手を出すと持っているものを手にのせる。 禁止後に対して反応し行動をとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 食べ物をマンマ、と言うなど有意味語が出はじめる。 言葉にならない音でまるで話ししているかのように話す。 	<ul style="list-style-type: none"> 指さしがさかんになる。 ボールを投げると投げかえず。
<p>1 歳 半 ご ろ</p>	<ul style="list-style-type: none"> 少し離れたところにあるものでも「ブーブー」とか「ママは？」と聞くと、そちらを向き、みつける。 簡単なことばによるたのみに答えて行動する。 目、耳、口などを聞かれる。 	<ul style="list-style-type: none"> 「アッタ」「ナイ」動物に対し、「ワンワン」などの言葉で言い表すようになる。 絵やものを指して自分からものの名前を言うようになる。 	
<p>2 歳 ご ろ</p>	<ul style="list-style-type: none"> お話を聞くことを楽しめるようになる。 絵本を持ってきて読んでもらったがる。 絵の中から、ものの名前をたずねると正しく指さす。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の意志、要求を言葉で言う。（一語文） 名前をよばれると返事する。 簡単な質問にも単語で答える。 友達の名前を覚えて言うようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> その場とびをする。 初歩的なぐりがきをする。 鏡の中の自分がわかる。

2 歳 半 ご ろ	<ul style="list-style-type: none"> ・上, 中, 下などのことばが理解できる。 ・大きい, 小さい, などの概念がわかる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・二語文を言うようになる (オンモイコウ, トケイアッタなど)。 ・「これなあに?」「どうして?」などの質問を多くする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・役あそびができるようになる。 ・なぐりがきをする (描いたものをあとから名づける。)
}	<ul style="list-style-type: none"> ・色の違いがわかり, 同じ色を集めたり分類する。 ・役になってあそぶこと, ままごとなどできる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・絵を見て状況を話せるようになる。 ・自分のもの, だれだれのものと言う。 ・「ボク」「ワタシ」の一人称代名詞が出はじめる。 	
3 歳 ご ろ	<ul style="list-style-type: none"> ・友達との会話も徐々に成立してくる。 ・前後, 横の概念ができてくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・助詞や助動詞を使いはじめる。 ・名前を聞かれると姓名を言う。 ・4から5語の文を言うようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達, 外の世界への関心が強まる。 ・自我意識がめざめる。
}	<ul style="list-style-type: none"> ・動物, 野菜, 乗物などの集合名詞を理解する。 ・お話してもらうことを喜び, 催促するようになる。自分が出てくる話, 友達や身近なもの, 小動物の出てくる話などを喜ぶ。 ・2つ, 3つの数がわかる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・両親の名を正しく言う。 ・「それでね」「そうしてね」などの接続詞を使って話す。 ・理由をつけて話すようになる。 ・自分の言葉による自分自身の行動調整を行う姿がみられる。 ・ないしょ話ができるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目的をもって絵を描き出す。頭足人間が出てくる。 ・初歩的思考の芽生え→ひとり言を言いながら何かをする。→徐々に頭の中だけで言葉による思考が進められるようになる。
4 歳 ご ろ	<ul style="list-style-type: none"> ・意味体系の学習がはじまってくる。 ・他人からの言葉による行動調整が可能になる。 ・ごろあわせ, 言葉のリズムを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今日, 昨日, 明日など時間の流れを理解して話す。 ・話し言葉が一段と進歩する。 	
}	<ul style="list-style-type: none"> ・積み重ね話や, 昔話のぐるぐる話をたのしんで聞く ・長めの話を筋を追って聞けるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・絵や人形を使って自分の体験の再現や, お話しの再現をたのしむ。 ・自分でも気に入ったものを覚えて言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・役割あそびの中で, 体験したことや社会的な職業などを表し, 友達とかかわりをもてるようになってくる。
5 歳	<ul style="list-style-type: none"> ・ことばのやりとりを通し, 理論的思考が発達してくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・構文, 構音, ことばの動きの面でも一応基本 	

6 歳 ご ろ	<ul style="list-style-type: none"> ・ルール感、他人の意志や感情も理解できる。(倫理的な理解と共感) ・ユーモアの話を理解し楽しめるようになる。 ・怖い話が聞けるようになる。 	<p>的な部分が、完成の域に達する(日本の子どもは、将来使う生活言語の下地を、ほぼ5歳までに完成することが多くの研究によって確かめられている)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・文字への関心をもちはじめ、読んだり書いたりしたがるようになる。
------------------	---	---	--

3 言葉を育てるには

(1) からだで語る

幼児が求めるものは、心と心のつながりであり、幼児は、自分の感情や思いを言葉よりも体で語ることから始める。まず、心を開くことから始め、それを言葉として受けとめていくことが大切である。幼児の言葉の表現は常に心と体が一体化していることを確認し理解していくことが必要である。

(2) 対話の中で育つ

対話をするとは、心と心が通じ合いひびき合い結ばれていく過程である。対話を思考し合うことは、言葉の発達に欠くことのできない重要なことであり、内言を育てる基礎としても大切である。子どもの行為には、それなりの意味があり、その意味を保育者も子どもも共に見出し認めていくことが必要でありこのような対話は、子どもと保育者の距離をせばめていき、心と心のつながりを実感していくことになる。自分を受け止めてくれる相手と会話をでき、対話が成立することにより、自分の言葉で話す体験が豊かになっていく。

(3) イメージと言葉

幼児は、その子なりの感じ方や思い、考え方があり自分なりのイメージを持って自分の遊びを展開していく。幼児期は、自分のもつイメージを自分なりに十分表現することそして、一人一人の内面にあるものが異なることを知ることが大切である。多様な体験とともに、自分と相手との経験を分

かち合うことで深まり広がっていくのである。

4 教師の言葉と援助

(1) 教師の言葉

幼児は、教師の言葉を手本として、それを模倣し、言葉を豊かにしていく。また教師の丁寧な言葉づかいは、幼児にも心よくひびくものである。よって教師は、子どもの言葉に流されるのではなく、語を選び、言葉を大事にし、整った文で話すことが大切である。また、教師の発する言葉によってイメージが広がり、幼児が感動や喜びを共有できるような援助の言葉になることが大切である。

(2) 教師の援助

教師の言葉かけは遊びや活動のチャンスときっかけをつくり、遊びや活動を充実させることにもなる。その意味で重要な役割をにない、保育の中で潤滑油的な存在であるといえる。

ゆえに、教師は幼児の心を揺さぶったり、あたたかくしたり、気づかせていくような言葉かけをすることが必要である。また、幼児にとって教師は何でもいてくれる、対応してくれる存在であり、常に幼児の言葉をゆったりとした気持ちで受け止め話すことの楽しさや喜びを味わわせていくことが大切である。

5 言葉と環境のかかわり

幼児の言語表現を支え、言葉を育むための環境としての三つの要素が考えられる。

(1) 幼児の内面を豊かにする環境

幼児の言葉は、幼児の内面を表現することであり、そのためには内面に自分の思いや、考えイメージが育っていることが大切である。日常生活における多様な経験や感動体験は、幼児に豊かな内面を育むようになることから、日常保育の中で豊かな体験ができる環境があることが必要である

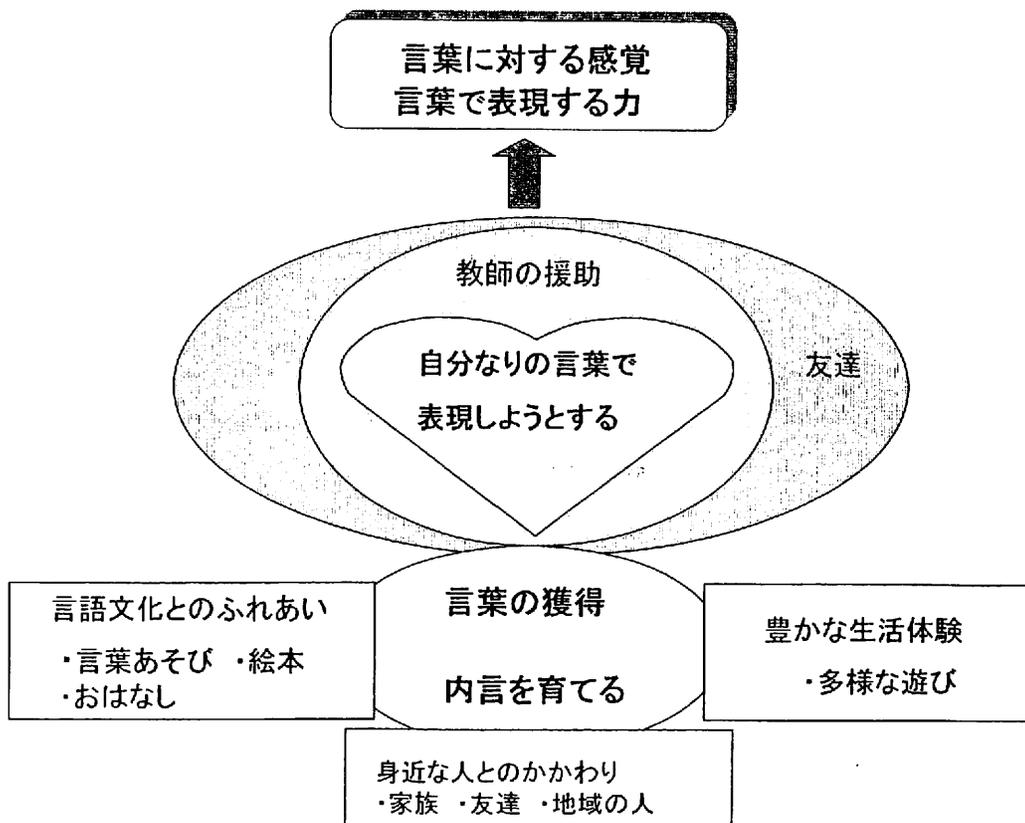
(2) 話すことが楽しい環境

幼児は、自分が話したいと思う相手、安心して話せる相手、話を聞いてくれる相手がいることで、自分の気持ちや内面を伝えようとする。言葉は、友達や教師とコミュニケーションする中で培われていくものであるから、幼児がリラックスして自分の気持ちを表現できる雰囲気や場づくりをしていくことが大切である。。

(3) 話す力を育てる環境

幼児が言葉で表現するためには、生活の中で語らいを増やし、話す力を培っていくことが必要である。。そのためには、言葉あそびを楽しんだり絵本や物語などに親しむことが大切であり、幼児が興味を持ってかかわるような環境づくりや工夫が必要である。

6 話す力を育む構造図



7、「言葉を楽しむ」年間計画

発達過程	1 学期	2 学期	3 学期
教師や気の合った友達とのかわり、友達同士で目的を持って幼稚園生活を展開し探めている時期	新たな友達とかかわり、受け入れ協力し合いまわっていき時期	自分の力を試しながら、友達同士で目的を持って幼稚園生活を展開し探めている時期	
<ul style="list-style-type: none"> 積極的に話しかけてくる子、教師の声かけをまわっている子など個人差がある。中には、黙ったままで意思表示のない子も見られる。 自分のしたいことを伝えるのに言葉ではなく「あれ」とか指さしたりして伝えようとする。 一緒に遊んでいるが、相手の名前が言えなかったり、言葉はないが遊びを楽しんでいる姿が見られる。 絵本や紙芝居を喜んで見ている。 好きな絵本を、何度でも取り出して、友達と一緒に見て楽しむようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分が体験したことを自分なりに友達の前で話すことを喜ぶ。 友達の話を聞いて、わからなかったことや疑問に思ったことを質問して確かめる場面が見られる。 しりとりや頭字あそびなどの言葉あそびに興味を持ち楽しむようになる。教師が入ると遊びも盛り上がるが、子ども同士だと遊びが持続できない。 自分が見ておもしろかった絵本を友達に教えたり、みんなの前で読んだりしておもしろい楽しさを感じるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達の名前やことばを反対から読んだり、うえから読んでもしたから読んでも同じことばなど、いろいろな言葉のあそびを自分たちで言い合い遊ぶようになる。 ペープサートなどの教材を使って、人形劇あそびをしたり、自分たちで話し合い、必要な人形を作り、演じて見せるなど意欲的になってくる。 	
教師や友達に親しみ、自分なりの言葉で表現する喜びを味わう。	言葉あそびや絵本を通して言葉の楽しさを味わう。	自分のイメージしたことや考えたことを言葉で表現する楽しさを味わう。	
<ul style="list-style-type: none"> あいさつができるようになる。 友達の名前が言えるようになる。 自分のしたいことやしてほしいことを先生や友達に伝えることができるようになる。 先生や友達と言葉のやりとりを楽しむ。 絵本やおはなしなどに親しみ興味を持って聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> 先生や友達の話を聞き、わからないことを質問したりするようになる。 自分の気持ちをわかるように伝えようとすることになる。 言葉あそびを楽しみ喜んでやろうとすることになる。 絵本やおはなしに親しみ、自分なりのイメージを広げる楽しさを味わう。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達との対話を楽しむ、気持ちが伝わっていく喜びを味わう。 言葉あそびを楽しみ工夫して遊ぶようになる。 絵本やおはなしなどに親しみ興味を持って見たり聞いたりすることになり、自分なりのイメージを言葉で表現する楽しさを味わう。 文字で言葉伝えることを楽しみ、取り入れて遊ぶようになる。 	
<ul style="list-style-type: none"> 言葉あそび 紹介あそび—(自分の紹介をする) ・ひっこしげーむ (果物や動物など) ・ぞなぞあそび ・仲間あつめ 	<ul style="list-style-type: none"> (友達を紹介する) ・しりとりあそび ・頭字あそび 	<ul style="list-style-type: none"> (なんでもひっこし) (替えうたづくりをする。) ・伝言あそび (ごんべいさんの赤ちゃん) (教えうた) 	
<ul style="list-style-type: none"> 絵かきうた ○手あそび(グーチョキパー)—(おちた おちた) ○伝承あそび(あぶくたつた)—(花いちもんめ) ○絵本を見たり聞いたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ペープサートや人形劇をする。 ○劇あそびをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・おはなしづくりをする。 	
<ul style="list-style-type: none"> 一人一人に声をかけ親しみをもち迎える。 思ったことや考えたことが、安心して言えるような雰囲気作りをする。 紙芝居や絵本の読み聞かせをしなが、絵本に親しませるようにする。 一緒に遊んだり、言葉かけたりして信頼関係を築いていく。 子どもたちの表現を認め、それぞれのよさを知らせ自信をもたせていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・おやつの後や降園児のちよつとした時間などに言葉あそびなどを行ない、興味を持たせようように、指人形やペープサートなどの教材を準備したり、舞台を設置したりして置く。 ・子どもが自分か思ったことをのびのびと表現できるように子ども工夫、努力などを温かく受け止め、共感する。 ・子どもが意欲的に取り組めるように、子どもたちの表現意欲を促すような言葉かけをしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 一人一人が自分の力を精一杯だして遊べる活動を多く取り入れていく。 ・幼児の生活する発想を大切に、イメージを豊かにするよう、言葉かけをしていく。 ・友達とのかわりの中で共通の目的を持たせ、友達と一緒に協力して活動できるよりに環境を構成し必要に応じて援助していく。 	

VI 研究の実際

1 検証保育

- (1) 主題 「なんでもひっこしげーむ」
 (2) 目標 友達と一緒に言葉あそびのゲームをすることにより、自分の考えたことを言葉で伝えることのおもしろさに気づき楽しさを味わう。
 (3) 設定の理由

一学期は、伝承あそびや手遊びを中心に言葉あそびを取り入れてきた。二学期になると、なぞなぞやしりとりあそびにも興味を持ち、グループで楽しんでいる姿が見られるようになり、最近では、しりとりや頭字あそびをすると、友達の答えるのが待てなくて代わりに答えたり、そつと教えてあげたりする様子が見られる。また、「さかさことば」や「うえからよんでもしたからよんでも同じ」言葉を言い合ったり、友達同士で言葉を楽しんでいる場面が見られ、言葉のおもしろさを感じてきたようである。

ひっこしゲームは、鬼になった子の言った言葉が伝わらないと成立しないゲームである。これまでは、果物や動物などの決めた言葉を伝えることをゲームの中で楽しんできたが、なんでもひっこしゲームにすることにより自分で言葉を考えて伝えることのおもしろさに気づき、話すことが楽しくなっていくのではないかと思い実践した。

(4) 検証保育の実践 「なんでもひっこしゲーム」

1回目

教師の援助	子どもの言葉と様子
<p>○ゲームの説明をする。 これまでのひっこしゲームとの違いを知らせルールについて話し合う。</p> <p>○教師が鬼になり練習し、ゲームをはじめる。</p> <p>○もっと違う言葉はないか考えさせるようにする。</p> <p>○同じ子が鬼にならないように声かけをする。</p>	<div data-bbox="812 1272 1292 1612" data-label="Image"> </div> <p>☆赤い洋服つけているひとひっこし ☆ピンクの洋服きているひとひっこし ☆黒い洋服きているひとひっこし</p> <p>①「もっと違う言葉はないかな」 「一分間考えてみよう」 ☆くつしたはいてないひとひっこし ☆黒いズボンはいてるひと ☆かばんにティッシュが入っているひとひっこし</p> <div data-bbox="1044 1764 1354 1850" data-label="Text" style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>目を閉じて考えている</p> </div>

○考え中でもなく
言葉が考えられ
い子には、耳打
してあげる。

☆かみのけをもっているひとひっこし
☆とうばんのときピンクのエプロン
つかうひとひっこし
☆ピアノのじょうずなひとひっこし
☆あさごはんをたべてきたひと
ひっこし
☆おねえちゃんのいるひとひっこし
☆虫の好きな人ひっこし
☆足が2つあるひとひっこしひっこし
☆長そでを着ているひとひっこし
☆朝ごはん食べてきてないひと
ひっこし
☆しまふくつけているひとひっこし
☆帽子もってきたひとひっこし
☆白のパンツはいているひと
ひっこし
☆かるたとりすきなひとひっこし
☆おもちゃいっぱいあるひとひっこし
☆男の子ひっこし
☆おうちにおはなをうえているひと
ひっこし
☆犬をかつているひとひっこし

言葉が思い浮かばない
子は、自分で考え中と
言って待って言葉を考
えている。周りの子は
しぜんに10かぞえ始
めセーノの合図で「な
んだろなんだろどうぞ」
で続いていく。

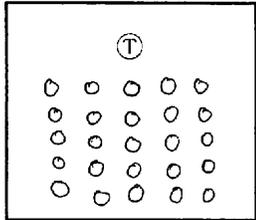
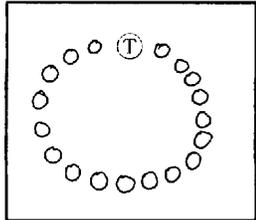
教師が耳打ちしてあげ
ることにダメという返
事が返ってくる。

<結果と考察>

- ・友達と一緒にゲームを楽しむという点では、友達を受け入れ楽しく遊びを進めていけるようになったことがわかり、育ちを確認できた。
- ・言葉は、生活体験を通してイメージされ、自分の言葉になって表現されることがわかった。



(5) <公開検証保育指導案>

日 時	平成 13 年 1 月 18 日 (木) 9:30 ~ 10:30		幼 児 の 姿	<ul style="list-style-type: none"> ・しりとりや頭音あそびなどもチームを作って競争したりして、ゲームな遊びを楽しんでいる。 ・「〇〇すきなひと」とか、自分の言った言葉に、手をあげてへんじをさせたりして、喜んでいる姿が見られる。
対象児	そら組 27 名			
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と一緒に言葉あそびを楽しむ。 ・自分のイメージしたことや考えたことを言葉で伝えることができる。 			
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・「へんしんカード」を使って話しをする。 ・「なんでもひっこしゲーム」をする。 			
時 間	場の構成	幼児の活動	教師の援助	
9:30		<ul style="list-style-type: none"> ○集まり ・手遊びをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・トイレに行ったり、使った道具を片づけて集まるように声かけをする。 ・次の活動が楽しく始められるように手遊びをして雰囲気を作る。 	
10:20		<ul style="list-style-type: none"> ○自分で作った「へんしんカード」を紹介する。 ○「ひっこしゲーム」をする。 <ul style="list-style-type: none"> ・イスを円にしてすわる。 ・ルールを確認する。 ・鬼になったらひっこしをさせる言葉を考える。 ・他の子たちの「なんだろなんだろどうぞ」の合図で鬼は、ひっこしの言葉を伝える。 ・その言葉に合った人は、他のイスへ移動する。そのすきに鬼もすわる。 ・すわれなかった子が次の鬼になる。 ○ゲームを終え、ゲームがどうだったか思ったこと 	<ul style="list-style-type: none"> ・紹介する子の話しを受けとめ、できた喜びを共感する。 ・教師もゲームに参加する。 ・ルールを理解しているか確認しながら説明する。(1回練習する) ・ひっこしの言葉が考えられない子には、一緒に考えてあげる。 ・進めながら子どもたちからの意見を受け止め、楽しくできるように、配慮していく。 	

10:30		を言う。 ・イスを片づける。	・一人一人の話を受け止め、 次回のゲームにつなげていく。
評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲームを理解し楽しんでいたか。 ・自分の考えたことを、伝えることができたか。 ・援助は適切であったか。 		

2回目（本時）

教師の援助	子どもの言葉と様子	
<ul style="list-style-type: none"> ○ルールを理解しているか確認する。 ○1回練習し始める。 ○教師も鬼になり、同じパターンでなく違う言葉に ○言葉の考えられない子には、耳打ちしてあげる。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆うわばきをはいているひとひっこし ☆体育着きているひとひっこし ☆赤い洋服きているひとひっこし ☆黄色い洋服きているひとひっこし ☆すいとうもっているひとひっこし ☆うわばきはいていないひとひっこし ☆手が2本あるひとひっこし ☆目が2つあるひとひっこし ☆おなじジャンパーきているひとひっこし ☆ひろみ先生すきなひとひっこし ☆めがねかけている先生すきなひとひっこし ☆ピアノきょうしつならっているひとひっこし ☆いちごだすきなひとひっこし ☆おべんとうもってきたひとひっこし ☆おとなの歯がはえてきたひとひっこし 	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>「やっと鬼になれた」 ばつゲームとっていたT男も鬼になれたかったようである</p> </div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>「ちょっと待ってあげよう。」 「教えてあげてもいいよ。」 言葉の考えられない子に対しての思いやりが見られた。</p> </div>

<結果と考察>

- ・言葉を伝えることを喜び、意識して鬼になりゲームを楽しんでいる子どもの姿が見られた。
- ・子どもに言葉を考えさせるタイミングや気づかせるための教師の適切な援助により、自分なりに考えた言葉になっていくことがわかった。

(6) 「なんでもひっこしゲーム」からのT子の変容

——これまでのT子の様子——

行動のすべてが自分なりのペースでゆっくりとしている。言葉での意思表示はなく、教師の言葉かけに対して、じっと見つめていることが多い。一学期は表情での意思表示から、名前を呼ばれたら返事をするようになり、言葉かけに対してもうなづいたり、返事をするだけのコミュニケーションであった。

しりとりや種類あつめなどの言葉あそびでも自分で言葉話すのに、時間がかかり周りが待ちきれずに教えてあげたりしていることが多い。

自分から進んで話したりすることはないが、友達の話を楽しそうに聞いている。

二学期になり、教師の言葉かけに返事をするようになってきた。

——なんでもひっこしゲーム1回目——

- ・鬼の言う言葉をよく聞いている。友達の動きをよく見て移動している。
 - ・「一分間考えてみよう」の言葉かけで、目を閉じている。
 - ・一回鬼になる。立ったまま、首をかしげて言葉を考えている。
- 教師のヒントを聞いて、考え伝える。

鬼になり、おどろいていたのではないだろうか。

教師からのヒント「なんでもいいよ、じぶんのすきにこといってごらん」で、イメージできたようである。

——なんでもひっこしゲーム 2回目(本時)——

- ・何回も鬼になる。
- 友達の声も素通りさせ、おいてあるイスを見つけて座ろうとしない。
- ・鬼になっても言葉が考えられずに困っている。
- 教師のヒントをうなづいて開き、自分なりに考えて伝えている。
- 4回目の鬼になった時は、ヒントもなしで考えた言葉を伝えることができた。
- 楽しそうな表情が見られる。

・意識して鬼になってしまうように思われる。ゲームの楽しさを味わっているのだろう。

・自分の言葉で伝えることを喜び、話すことが楽しくなってきたように思われる。

——その後のT子の様子——

- ・自分のやりたいことへの意思表示ができるようになってきた。
- ・人形劇など進んでやるようになり、積極的にやりたい役に希望し、声は小さいが自分なりに考えて話している。

なんでもひっこしゲームで友達と一緒にやることの楽しさに気づき、人前で話せたことで自信が持てたのだろう。

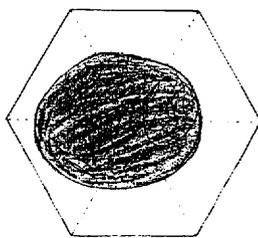
2 教材の工夫

(1) へんしんカード

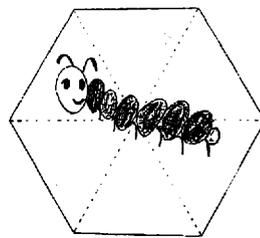
ねらい：へんしんカードを使って、話し作りを楽しむ。

教師の援助	子どもの様子
<ul style="list-style-type: none"> ・へんしんカードを見せ、興味を持たせるようにする。 ・コーナーを作り、へんしんカードの折り方を図式にしておき、作れるように用紙を準備しておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の作ったへんしんカードを使って、遊んでいる。 ・「おもしろいね」「手品みたい」「私もつくりたい。作り方おしえて」 ・友達同士で教え合ったりしながら一生懸命作っている。 ・絵を変化させながら、話しを考えている。 ・友達同士、見せ合って遊んでいる。

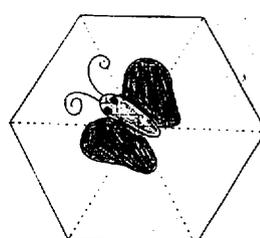
<作品の例>



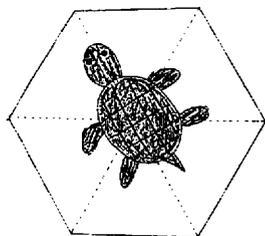
卵がありました。
何の卵かな。



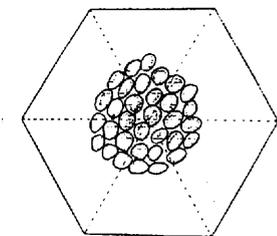
青虫になりました。
きれいな色でしょう。



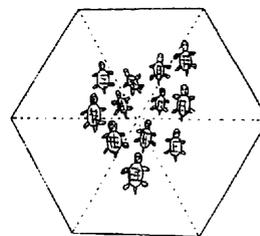
ちょうちょになって
ひらひら飛んでいきました。



おおきなかめがいました。



かめは、あなをほって
卵をたくさんうみました。



あかちゃんがたくさんうまれて
みんなで海に帰っていきました。

<結果と考察>

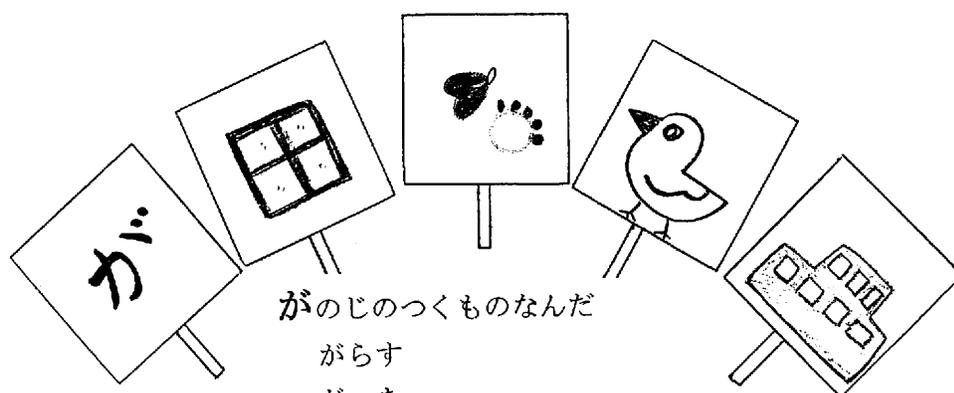
- ・へんしんカードに興味を持ち、意欲的に取り組んでいた。
- ・カードを変化させることがうまくいかず、絵と話しが合わなくなり作り直したり、絵に合わせて話をかえたりする等、その子なりの工夫が見られて良かった。
- ・自作のカードができたことを喜び、2つ、3つと話をかえて作っている姿が見られ、話しを楽しんでいるのが確認できた。

(2) ペープサートにする

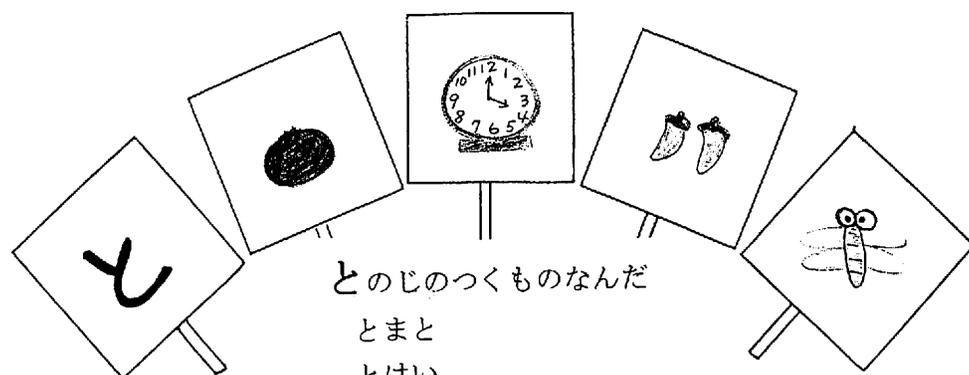
ねらい：ペープサートを使って頭音遊びを楽しむ。

教師の援助	子どもの様子
<ul style="list-style-type: none"> ・「かの字のつくもの」ペープサートを出しておく。 ・ペープサートを演じてみせる。 ・子どもたちにやってもらい、「かの字のつくもの」のうたを一緒に楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ペープサートを見ている。 ・「これなに？どんなしてやるの」 ・「私もやりたい」交代してやり喜んでいる。 ・「あの字のつくもの」など自分たちで考え、ペープサートを作っている。 ・語尾の部分では、それぞれのイメージを言い合いながら、歌詞を決めている。

<作品の例>



かのじのつくものなんだ
 がらす
 がっき
 がちょう
 がっこうが、ガタガタゆれた。

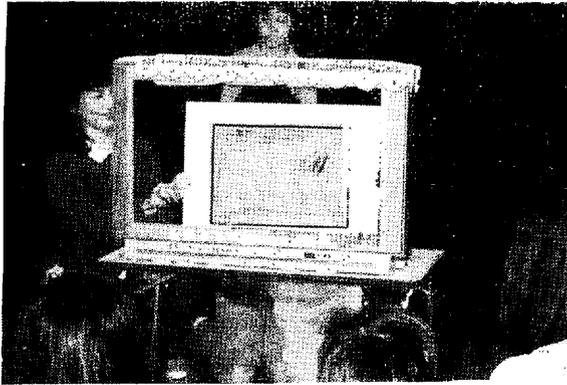


とのじのつくものなんだ
 とまと
 とけい
 とんがらし
 とんぼがすいすいとんだ。

<結果と考察>

- ・言葉あそびに関心の薄い子たちも、友達と一緒にペープサートを作ったり、演じたりして楽しんでいる姿が見られた。
- ・擬声語や擬態語のおもしろさに気づき、言葉を替えて歌い楽しんでいる。

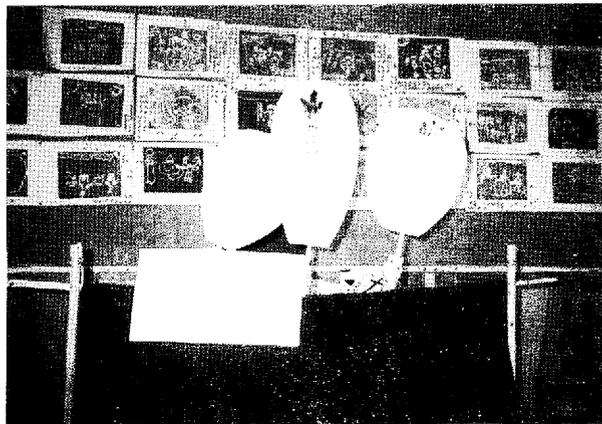
(3) 教材を使っておはなしを楽しんでいる様子



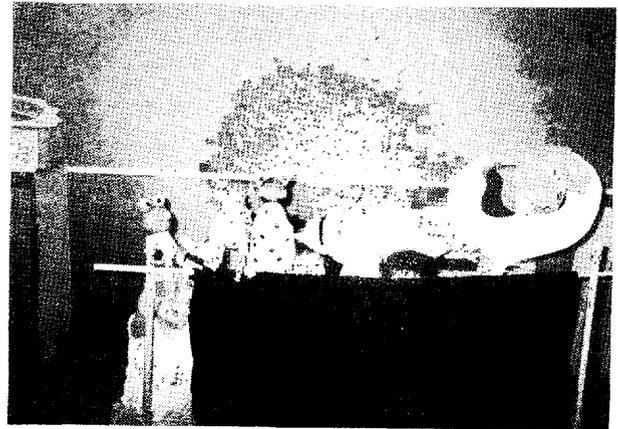
<紙芝居を使って>



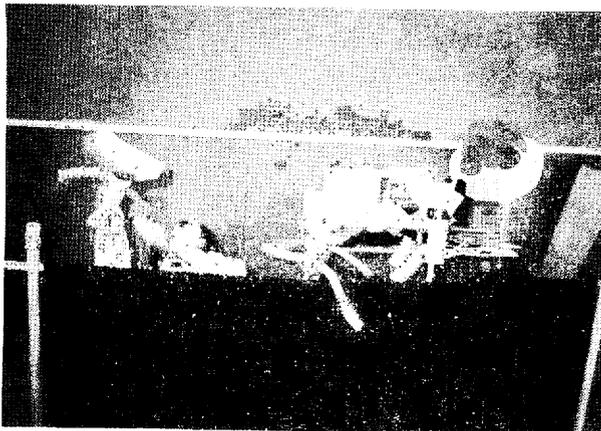
<ボードを使って>



<ペープサートを使って>



<指人形を使って>



<ボードビル人形を使って>



<パクパク人形を使って>

<結果と考察>

- ・牛乳パックなどの身近にある素材を利用した教材を喜び、自分たちも意欲的に教材作りに取り組んでいた。
- ・友達同士、自分で作った人形を使って会話を楽しんでいる姿が見られた。

VI 研究の成果と今後の課題

1. 研究の成果

<仮説1について>

幼児一人一人の触れ合いを大切にし、気持ちを受け止め雰囲気作りをすることにより、

- (1) 教師や友達に自分から声をかけ、言葉のやりとりを楽しんでいる。
- (2) 自分の体験したことを積極的に話すようになった。
- (3) 必要な場面において、自分の考えを話すことができるようになり、相手の話を聞いてあげることができるようになってきた。

<仮説2について>

言葉あそびを通して、言葉のおもしろさに気づかせていくことにより、

- (1) 園生活の中で互いに相手の話すことを理解しようとする言葉のやりとりが見られるようになった。

<仮説3について>

絵本やおはなしを楽しむ環境や教材を工夫することにより、

- (1) 絵本の広場の工夫により、絵本を楽しむ子どもが増え、友達関係も広がってきた。
- (2) 絵本やおはなしへの関心が高まり、自分のやりたいことに主体的に取り組むようになってきた。
- (3) 園生活でのいろいろな場面ではっきりと自分の意志を伝えられるようになった。以上のことから、話す力が育まれてきたことを確認できた。

2. 今後の課題

- (1) 聞く、伝えることにも目を向け、家庭との連携を図り、一人一人の発達に応じた援助に努めていく。
- (2) 園生活での多様な体験を通して話す力を培っていけるような活動の工夫をしたい。

おわりに

幼児一人一人が、素直に自分の気持ちや考えを言葉で表現できる子になってほしいと願い研究してきました。研究を通して言葉教育の大切さを認識し、人とかかわりの中で心と心のつながりを通して育まれていくことがわかり、教師の援助の必要性を実感しました。これからも、幼児一人一人を受け止め、心の交流を図っていく中で話す力を培うための援助に努めていきたいと思えます。

研究期間中、やさしく丁寧に御指導くださいました浦添市教育委員会の比嘉美也子指導主事研究所に快く送り出してくださいました我那覇英一園長、高江洲弘美副園長、陰ながら支えてくれた職員の皆様に心から感謝申し上げます。また、大きな心で励まし、見守ってくださった新城英将所長、新川純子係長、与古田思信指導主事、温かい言葉をかけてくださった職員の皆様、6ヶ月間共に過ごした研究員のメンバーに厚くお礼を申し上げます。

<引用・参考文献>

- ・幼稚園教育要領解説 文部省平成11年発行
フレーベル館
- ・言葉 村井潤一編著
ひかりのくに
- ・保育内容 言葉 阿部明子編著
建帛社
- ・演習保育講座 保育内容 言葉
高杉自子・岩崎婉子編
光生館
- ・領域 言葉 村石昭三・関口準編
同文書院
- ・乳幼児の言葉と文学教育
コダーイ芸術教育研究所 木村はるみ